

二強^てサガ₆

N E W S A G A

阿部正行

Abe Masayuki



ガルガン帝国第三皇子。
放蕩皇子として悪名高いが、最も父に似る。

マイザー・レング・ガルガン

ガルガン帝国第二皇子。
真面目で優秀ながら、甘さを捨てきれない。

コンラート・フォーク・ガルガン

暗殺をはじめとする闇の技術を受継ぐ「シノビ」一族出身の美女。

ミナギ

カイルの幼馴染で、女の子に目がないムードメーカー。

セラン

ウルザ

美しきエルフの精霊使い。
カイルの村を訪れ、
なし崩し的に仲間になる。

リーゼ

おさなしみ
カイルの幼馴染。格闘の才能があり、その腕前はかなりのもの。

カイル

主人公の魔法剣士。
一度魔王を倒したが、
真紅の宝石の力で過去に戻り、再び冒険を始める。

シルドニア

マジックキング
伝説の『魔法王』が自分の人格や知識の一部を複製した魔剣の精神体。

ミレーナ

シルグス王国の美しき女王。
逝去した父に代わって国を取り仕切る。

ベアドーラ

ガルガン帝国の重鎮である宮廷魔道士。

アンジェラ・イネス・ガルガン

ガルガン帝国ベネディクス皇帝の末子。
皇位継承を巡って争う兄達の間で揺れ動く。

Main Characters
主な登場人物

プロローグ

豪雨降りしきる闇の中の戦場。そこでは三つの死が暴れていた。

一つは、暴威^{ぼうい}を撒^まき散^ちらすかのような死だ。

暗闇の中ではのかに光る【ライト】の魔法が込められた魔道具の下に今、必死の形相をした兵が数十人も固まっている。

兵士でありながら、彼らは組織だった行動を取れていない。指揮をするはずの上官が既に行方不明——おそらくは死亡——となっていたからだ。

状況もほとんど理解できておらず、解っているのは今が夜襲を受けている最中で、それも大きな被害が出ているらしい、という不確かな情報だけ。

訳も解らず死にたくない、少しでも周りの様子が掴めそうな明かりの下に集まった。ただそれだけだった。

大体、戦おうにも敵の位置が不明ではどうしようもない。本当なら逃げ出したいところだが、逃

亡は死刑と軍規で決まっているため、なんとか恐怖をこらえて剣を構え、槍を握りしめる。

そして、それぞれがばらばらに周囲を警戒する中、闇の奥から破壊と死が具現化したかのような存在——セランが現れた。

「ひっ!」

たまたまそちらを見ていた兵の一人がそれに気付くが、彼が行えたのは意味のない悲鳴を漏らすことだけ。手にした槍での反撃はおろか、周りに警告を与えることさえできない。

野生の獣をも超える速さで一瞬にして間合いに入ったセランの剛剣により、その兵士は宙を舞った。彼が最後に見た光景は、ひしゃげた己の身体、舞い散る手足、回転する地面、そして自分と同じように飛ばされた仲間の姿であった。

たったのひと振りですとめて弾き飛ばされた彼らは、地面に落下するとそれきり動かなくなり、更に次の犠牲者がそのすぐそばに、ばらまかれた塵ちりのように落ちてくる。

それは戦いなどではなく、巨獣の突進、いや巨大な竜巻に巻き込まれた人がばらばらにされて死んでいく自然災害と同じだった。

ここは戦場で、兵達は戦いに来ているのだ。殺し殺される覚悟はあったはずである。

だがこうまで理不尽な死は想像していなかっただろうし、受け入れられものではない。

その場にいた半数が暴威にさらされて為す術もなく死んだ後、残りの半数は抵抗を諦め、逃亡を

図った。軍規による死罪と、この場において迎える結末を両天秤にかけ、少しでも可能性のある方に賭けたのだ。

いくつかに別れて逃亡したのは、示し合わせて少しでも生存率を上げようとした——のではなく、単に一秒でも早くこの場から離れようと逃げ出した結果、たまたま方向が散ったに過ぎない。

瞬時に状況を理解したセランは、最も人数が多く固まっている十人ほどの集団に向けて、攻撃魔法の込められた魔石を投げつける。

この魔石に込められていたのは【ライトニング】という雷系の魔法だが、これは今日のような雨の日は拡散してしまい、威力が弱くなる特性を持っている。

だがその分効果範囲は広まり、一撃必殺とはいかずとも足止めにはうってつけとなる。そのためセランは魔石を投げつけると同時に別方向に向き直り、最も逃走の足が速い者に襲い掛かった。

敵を全滅させるにはこれが最適解だと、セランは刹那せうなの間に判断したのだ。このような生まれ持った戦いのセンスとでもいうべきものが、彼の強みの一つなのである。

そのまま目論見もくろみ通り順番に標的を仕留めていき、最後に痺しびれて逃げ足の鈍い集団に戻って、一人ひとりに止めを刺した。セランが最初に襲い掛かってからここまで、百秒と経っていない。

セランは周囲に生き残りがいないと確認した後も、しばらくは警戒を解かずにはいた。

そして近くに敵がいないと解るとほんの少しだけ気を緩めようとしたが、慌てて首を横に振る。

「おっといかんいかん、調子に乗らないようにしなきゃな。また痛い目を見かねない……剣よし、魔石よし、体力よし」

いついかなるときでも不敵であることを信条とするセランだが、今回ばかりは気を引き締めて己の状態をつぶさに確認した。

今日だけで軽く百人以上、しかも攻撃を受け止めようとした剣や槍、鎧ごと断ち切っている。ここまで斬れば普通はどんな名剣でも使い物にならなくなるものの、セランが持つのは三百年前の魔族との大戦で魔王をも討ち取った伝説の聖剣だ。使い手の腕前と合わさった結果、未だに刃こぼれ一つない。

魔石の残数、自身に残された体力から、セランはあとどれくらい戦えるかを逆算する。

「……まだまだ問題なくいけるな。ほんと数だけはいからな」

この戦の中で、セランの役目はとにかく敵兵を減らすことにあつた。まだまだいるであろう敵兵を想像したセランは、そのまま新たな獲物を探しに闇の中へと消えていった。

もう一つの死は、忍び寄る死だ。

別の場所に、セランが狙ったのと同じように魔道具の明かりに集まる兵が二十人ほどいた。

「全員固まれ、周囲をくまなく見張るんだ！」

違ったのは、兵達に対して隊長が必死に号令を出していることで、彼らはまだ組織だった行動を取れている。

「静まれ、とにかく落ち着くんだ！」

隊長は騒ぐ部下に張り裂けんばかりの大声を出して統率を試みるが、それは自分を落ち着かせるためでもあつた。

周りで戦闘が起こっているのは確かである。しかし上官とは全く連絡が取れず、事態が把握できない。その上、闇と豪雨という状況だ。情報が遮断しやだんされた中での移動は危険と判断し、頼りない光に縋すがるように、こうしてここにとどまることを選択していた。

どれぐらいの時が経ったのだろうか、突如ふわりと白い何かが飛んできた。

それは雨に濡れて重くなった天幕の一部のようであつたが、正確に魔道具の照明部分へと巻き付いた。

すると固定されていなかった魔導具が、その重さにより倒れ込み、しかも布に明かりが遮おさえられて辺りは闇に包まれた。

「は、早く立て直すんだ！」

絶叫にも似た命令の声に従って、部下達は慌てて手探りで布を取り払い、何とか魔導具を元通り立たせることに成功する。

思ったよりも早く視界が回復し、皆がほっとひと息つくが、同時に疑問も湧いた。

豪雨ではあるが風はあまりないため、このような布が飛んでくるはずはないのだ。一体何故、と隊長は周りを見渡し、ある違和感に気付く。

そしてその違和感の正体が解ると、腰を抜かさんばかりに驚いた。

「ど、どこに行った!？」

寄せ集め故に正確な数を把握していたわけではないが、さっきまでは兵が二十人以上いたはずだ。だが今はどんなに数えても十一人。半分しかない。

隊長の言った意味に兵達も気付き、徐々に混乱が広がっていく。

ついさっきまで、お互いの息がかかるほど離れずにいた同僚がどこかに消えたのだ。恐怖以外の何物でもない。

それでも何とか場を鎮めようと、隊長が大声を出そうとしたとき――

「た、隊長!」

震える声で部下の一人が指差した方向、明かりがぎりぎり届くか届かないかの境目となる場所に、兵が一人倒れているのが見えた。

見えるのはこちらに足が向いた半身だけだが、先ほどまでは絶対にそこにいなかったのは断言できる。

普通に考えればそれは消えた部下なのだろうが、近づかなければ生きてるか死んでいるかさえ解らない。

隊長は判断に迷った。確認に行かせるべきか、否か。

可能性は低いが、倒れている兵士が生きているのならば助けねばならない。しかし確認をしてしまえば更に絶望が広がるかもしれない。

「おい、誰か……!？」

迷った末、確認に行けと命令しようと振り返った隊長は、今度こそ心の臓が止まるかのようなショックを受けた。

後ろにいた兵が五人に減っている。

あの半身に気を取られた間に減った、いや減らされたのだ。

「ひっ……ひいつ!？」

隊長と同じように新たな怪奇現象に気付いた残りの兵達が絶叫を上げる。それから唯一縋れる明かりの魔道具を囲むように、残った兵は身を寄せ合った。

がちがちとうるさいまでに歯が鳴り、剣を握る手は力の入れ過ぎで白くなっていて、このままではまともな戦闘などできないだろうほどに全身が強張っている。

このまま時が過ぎて朝になってくれれば……皆がそんな思いでいたが、それも長くは続かない。

また白い布が飛んできたのだ。

「だ、だめだっ！」

また闇に覆われれば、そのときに消えるのは誰か……想像したくもなかった。

隊長は必死に手を伸ばし、魔導具が倒れないように、闇が訪れないように布を掴もうとする。だが無情にも指先が触れただけで、辺りは再び闇に包まれた。

そして直後に——全員の意識もまた闇に包まれたのだった。

「ふう……ようやく片付いた。手間がかかったけど、これで邪魔はいなくなったわね」

闇に紛れて動き、ひと仕事終えたミナギが声を漏らした。

ミナギの目的は、ここから少し離れたところにある医薬品を、爆発魔法【エクスプロージョン】が込められた魔石で吹き飛ばすことにあった。これがなくなれば相手が軍を維持するのは難しくなる。しかしそれに取りかかるには丁度この隊が邪魔だったのだ。

彼女の得意とする戦い方は、背後から捌め手を狙う奇襲だ。正面から戦っても決して負けなかっただろうが、長丁場故に少しでも消耗を減らしたかった。

「さて次は……兵糧ね。今度は近くに兵がいなければいいのだけど」

首尾よく目的を遂げた後も、ミナギの破壊活動は続く。

最後の一つは凄惨な死だった。

無残で残酷な死をもたらすのはカイルだ。

カイルもまた戦場を駆けながら戦い続けていたが、仲間の二人とは殺し方が違った。間違いない死に至るがすぐには死なない傷を与える、取りようによつては罫り殺しとも言える攻撃をあえて行っていた。

ある者は腕を斬り落とした上で眼を潰して彷徨い歩くように仕向けたり、ある者は腹を斬り裂き漏れた内臓を必死に掻き集めるようにさせたりと、わざとものがき苦しませる。

使用する魔石もまた凶悪なものを選んでいる。

毒煙を放つ【ボイズン・クラウド】や、酸の煙で攻撃する【アシッド・クラウド】などにより、兵士達は身体どころか呼吸器をはじめ内臓まで爛れさせ、苦悶の中で死んでいく。

【クラウド】系の魔法は雨の中では効力が弱まるので、本来今日という日には向いてないのだが、それでも使う理由は唯一つ。死ぬに死ねないダメージで長く苦しませ、怨嗟の声を響き渡らせるため、恐怖を撒き散らすためだ。

カイルは闇と雨により隊からはぐれたのであろう兵三名を新たに見つけ、襲い掛かる。

まず一人目の首を半ばまで断ち、返す剣で隣にいた二人目の顎を斬り飛ばした後、三人目は剣の柄で胸板部分を強打する。吹き飛ばされたその兵は砕かれた肋骨が肺にでも刺さったのか、大量に

吐血したつきり動かない。

一瞬にして三人に致命傷を与え、次に行こうとしたカイルだったが、倒れて首を押さえている兵と目が合ってしまった。

血と共に命そのものが流れ出ていつてしまっているかのようなその男は、死にたくないと必死に訴えてカイルを見る。だが、三者三様に苦しむ様を見下ろしながらも、カイルは助けることは勿論止めを刺すこともしない。

放置していく——他の兵に見つけられるように、少しでも彼らの凄惨な死が広まるように。

これらの目的は、全て敵軍の戦意を挫くことにある。

より無残な殺し方こそが恐怖を煽り、厭戦感情を高め、戦争を終わらせるためには効率がいい。そう信じるからこそ、カイルはこのような殺し方を選んでいった。

「……次」

陰鬱とした顔で、カイルは次の標的へと向かっていく。一秒でも早く、戦争そのものを終わらせるために。

三つの死がもたらす恐怖。それは毒のようにじわじわと、ガルガン帝国を揺るがす内戦の最前線に広まっていった。

1

話は少しだけ遡り、舞台はガルガン帝国の帝都ルオス——人族最大の都市である。

実力主義の帝国らしく、人間だけではなく様々な種族がひしめく、雑多で混沌としたこの都市の人口は五十万とも言われているが、正確な数は帝国自体も把握していない。

いつもはその規模に見合った賑わいがあるのだが、現在は都市全体が異常なまでに静まり返っていた。

いや、正確には息を潜めていると言うべきか。以前ジルグス王国にてレモナス王が崩御した際の王都と似ているが、あのときにはない、ただならぬ緊張感に包まれていた。

その理由は、今から五日前に、皇帝に成り代わって政務を取り仕切っていた第一皇子エルドランドが急死し、更に末のアンジェラ皇女も行方不明という非常事態のためだ。

エルドランドの死は、公式の発表ではあくまで急死となっているが、発表直後から軍が帝都を取り囲み、何人の出入りも許されなくなった。このことから、実際は何者かによって暗殺され、犯人を逃がさないように封鎖したのだともつばらの噂となっている。その噂は、瞬く間に人族領全域に

広まっていた。

帝都ルオスは分厚く見上げるような三重の城壁に囲まれており、一番外側にある大門は、普段なら日に何千何万もの人族が出入りしている。その城壁の周りには、今現在街に入ることのできない商人や旅人がたむろしており、さながら野営地のようであった。

品物を納入できないのは商人にとって死活問題であるが、さりとてどうしようもない。中でも遅い部類の商人は、同じように閉め出されて帰ることができない住人達相手に商売を始める始末。

その周囲を、通常時の衛兵姿ではなく、戦争用に武装した帝国軍の兵士が見回る。蟻一匹見逃さないと言わんばかりに厳しいその警備振りが、物々しさと異様さを際立たせている。

そんな厳戒態勢の中を、新たな商隊らしき荷車の群れが列をなして城門に向かった。巨大な物を大量に運んでいるのか、家畜の中でも高い馬力を誇る四角牛よんかくぎゅう何頭かで引かれ、荷車の車輪は地面にめり込んでいた。

隊員もかなりの大人数で、冒険者らしき護衛も含めれば軽く百人を超える。

「現在帝都の出入りは禁止されている！ 速やかに止まれ」

兵士が先頭の馬車の前に立ちはだかり、おそらくここ数日で何百回、何千回と繰り返しだろ台詞を大声で叫んだ。

その警告に素直に従って停止した馬車から、初老の商人が降り立った。

「お勤めご苦労様でございます。私はマルニコ商会のクラウスと申します」

深々と頭を下げたのは、世の商人の頂点に立つと言っても過言ではない存在だ。

「な……クラウスだど？」

衛兵もその名は当然知っていたらしく、思わず声を上げてしまった。帝国にとっても重要な人物の登場に、周りからも軽ぐざわめきが起こる。

「その件は重々承知しておりますが、こちらの品は、遠くオベロス山脈より運んで参りました最高品質の石材です……どうぞご覧ください。これほどの物は滅多に手に入れることができません」

よく通る声で滔々とたとうと淀みなく、まるで歌劇の一部のようにクラウスが口上を述べると、使用人がすぐさま積み荷を覆っていた布を取る。果たして現れたのは、一点の汚れけがもない純白で、素人目にも最高級と解るほど美しく巨大な化粧石だった。

「御存知かと思いますが、これはアスメリア様の霊廟れいびやうの建築素材でして、仕上げとなります正面部分に使われるものを、傷一つないよう慎重に運んで参りました」

三年前に亡くなった、帝国の母として名高いアスメリア皇后の霊廟は、現在帝都中央部にて建築が進んでいる。クラウスはその中で最も目立つ正面部分のための石材を運んでいるというのだ。

皇后の名を出され、検分しようと近づいた兵士が慌てて後ずさる。

「つ、積み荷は解った。しかし、今帝都は何人も出入りしてはならないときつく……」

戸惑う兵士の言葉を遮るように、クラウスが畳みかける。

「しかしながら指定の月日までに必ず完成させよとの陛下直々の御命令でして……このように陛下直筆の署名もあります」

クラウスが恭しく、やや芝居がかった動作で取り出したのは、盾に絡みつく黄金の蛇の紋章と、皇帝ベネディクスの署名が入った豪華な書状だ。

「もし納入の遅れが原因で半年後の落成式に間に合わない場合、私の首は飛んでしまいますし……ご迷惑をかけてしまう事態になるかもしれません」

そちらの責任にもなると暗に言われ、兵士の背筋に冷たいものが走った。彼らは既に周囲の注目の的となっており、関わりを誤魔化すこともできそうにない。

「し、しばし待て」

自分では判断しかねたようで慌てて立ち去る兵士の背を見送りながら、クラウスは軽いため息をつく。その背後に、使用人姿の男がそっと近寄ってきた。

「上手くいきそうか？」

使用人が主人に向ける言葉遣いではない。何を隠そう、それは使用人に扮したカイルだった。

「手応えはあります、あれだけ言えば上の方に確認を取りますから……ここが地方で平時ならば、

袖の下も有効なのですがね」

流石に帝国の心臓部である帝都でその手は使えない、とクラウスは苦笑する。

「しかし、まさか完全に封鎖しているとは思いませんでした。思い切ったことをしますね」

このクラウスの感想にカイルも同意する。

兵士が睨みを利かせていることと、最低限の食料などを配っているおかげもあって、今のところ大門の周りに大きな混乱はないようだ。

住人が五十万を超える帝都だが、いざ戦争が起きて籠城となったときに備えて物資が大量に備蓄されており、その気になれば年単位で封鎖もできる。

だがそれはあくまで最低限の消費に抑えた場合の話で、快適な生活には程遠く、都市内の不安は遠からず限界を迎えるだろう。

（それまでに犯人を捕まえるつもりなのか、それとも他に問題でもあるのか……）

そんなことを考えながらしばらく待っていると、武装した帝国兵が集まり始めたのが見え、少し雲行きが怪しくなってきたかとカイルは警戒を強める。

「何かまずそうか？」

不穏な気配を感じたのか、護衛の冒険者に扮するセランが聞いてきた。

「解らん……警戒しているのは侵入者じゃなくて主に逃亡者のはずだから、そうそう変なことにはならないと思うが……万一の際も大人しくしててくれよ。好き好んで揉め事は起こしたくない」

「へいへい……まあ最悪、ばれても何とかなるしな」

そう言うときランは、ちらりと石材の方を見てから引っ込んだ。

しばらくすると、多くの兵士を引き連れたいかつい顔の壮年の男が歩いてきた。その華美な鎧から、帝国が誇る五將軍の一人だと解る。

「まあいい方がいましたねえ……ダルゴフ將軍ですよ」

いかにも頑固そうな顔を更に厳しくして向かってくるダルゴフを見て、クラウドが苦笑いの顔になった。その反応から、カイルも企みが失敗したことを悟る。

（ダルゴフ將軍……近隣諸国にも名が知られている猛将だったな、この頃も）

クラウドの力を借りてでも秘密裏に帝都に入りたかったが、これが無理となると別の手を練り直すか、もしくは最後の手に出るか。そんな風に考えていると、ダルゴフが目の前にやってきた。

「これはこれはダルゴフ將軍、御無沙汰しております」

知己があつたのか、クラウドがダルゴフに慇懃な挨拶をする。

「挨拶などいい、たとえばアスメリア様の靈廟のためであろうと今は通すわけには……」

静かな、だが断固とした態度のダルゴフだったが、丁度そのとき、彼の側近らしき兵士が駆け寄っ

てきて耳打ちをした。

するとダルゴフの顔色が一瞬にして変わり、何か反論しようとしたが、結局首を横に振って痛烈な舌打ちを一つするにとどまる。

「……特例だ、通つていい」

ダルゴフは明らかに不本意そうな表情で、通行の許可を与えた。

「これはこれは……ありがとうございます」

驚きながらもクラウドが頭を下げて礼を言うと、重々しい音が響き、大門がゆっくりと開かれていった。

この様子を見ていた者達からの不満の視線を感じつつ、ダルゴフの気が変わらないうちにとクラウドは出立の合図をする。

そうして苦い顔のダルゴフの視線を背中に受けながら、荷車はゆっくりと進み始めた。

「ふう……文字通り、第一関門突破だな」

大門を潜り抜けながら、下働きの使用人姿に変装していたウルザが呟いた。頭に日差し避けの布を巻きつけて特徴的な長い耳を隠し、顔も土で汚すなど、その目立つエルフの美貌を隠している。

「でも、いいのかしら？ そんな大事な建材にこんなことして」

同じように下働き姿のリーゼが、先ほどのクラウドの口上を思い出し、荷車に載った巨大な石材

を見上げて首を傾^かげる。

「お母様は細かいことを気にしない人でしたから、これくらいきつと許してくれます」

その疑問に答えるように、石材の中からもぐった声が聞こえてきた。

「あまり声を出さないでください」

慌てて駆け寄ったカイルが周りを警戒しながら小声で注意をする。幸い周囲の帝国兵に気づかれた様子はなく、カイルは安堵のため息をつく。

「ふふ、ごめんなさい。ちょっと退屈で……でも、この私が帝都に忍び込むことになるとは思いませんでした」

その声の正体は、現在行方不明とされているアンジェラ皇女であった。彼女は石材をくりぬいて作った空間に隠れていたのだ。

アンジェラの笑い声は、はじめこそいつも通り優雅で艶^{つや}やかなものだったが、後半はどこか物憂^{ものう}げで寂しさを感じさせた。

カイル達が正体を隠して入国しなければならぬ理由が、彼女の存在だ。

帝国の皇女であるアンジェラならば無論、今の帝都にも堂々と入ることはできる。だがそれをするわけにはいかない理由がある。

ひと月ほど前、アンジェラ皇女は何者かに命を狙われた。

刺客を放った黒幕の正体は解らず、誰が味方で誰が敵かも解らない状況になったアンジェラは、思い切った手に出た。

安全を確保するため誰にも告げず失踪し、カイル達に同行したのだ。

もしアンジェラを狙った者がエルドランドを暗殺した者と同じだった場合、ただそのま戻ったのでは再び襲われる可能性がある。そのためこうして密かに潜入することになった。

(さて、何とか入れたが……この後をどうするかだな)

正直カイルにもいい考えはない。

本来の歴史であるカイルの一度目の人生でも、エルドランドは暗殺されている。そのときの黒幕はジルグス国のレモナス王で、実行犯はミナギだった。確証があったわけではないがそれほど間違いなく、だからこそ、もうエルドランドの暗殺が起こることはないとかイルは思っていた。依頼者であるレモナス王は既に死亡し、何より今世のミナギはカイルと同行しているのだから。

(だが起こってしまった。暗殺そのものの時期も三月近く早い……一体誰が？ 何のために?)
考え込んでも答えが出るはずはなく、カイルは一度頭を振った後、帝都の中央にある巨大な宮殿の方に顔を向けた。

武を尊^{とつと}ぶガルガン帝国らしく、無骨ではあるが威厳を感じさせる造りで、この距離でも圧迫感さえある。

これからそこで起こるであろう騒動を予感し、カイルは胸騒ぎを覚えながら宮殿を見つめた。

2

カイル達一行は、帝都の目抜き通りにあるマルニコ商会の支店に併設された倉庫へと向かった。開け放たれた扉を潜って荷車が倉庫に入ると、周りの目を避けるように急いで扉が閉められる。そして倉庫内に最小限の人員しかいなかったことを確認すると、クラウスの指示によって細工を施された石材の蓋が外され、隠れていたアンジェラが出てくる。

「ふう、思ったより疲れましたわね」

それほど長い時間ではなかったとはいえ、石の中でじっとして身体が強張ったのか、アンジェラは思い切り伸びをする。活動的な彼女にとって、じっと大人しくしているのは苦痛だったのだろう。「ご不便をおかけしました。顔がよく知られておりますアンジェラ様ですと、万一のことがございますので」

クラウスが^{いたわ}りの言葉をかけた。

「ええ、解っています……面倒をかけましたね。このお礼はいずれ必ず」

「いえいえ、これぐらい大したことではありません。それほど危険な橋ではありませんし」

逆にアンジェラから労われ、クラウスは苦笑する。

実際、皇女であるアンジェラの身を守るという大義名分があるため、発覚しても言い逃れはいくらでもできた。クラウスからしてみれば、これでアンジェラ皇女に貸しを作れたなら安いものだった。「私はあくまで帝都に入るお手伝いをしただけですので……」

クラウスはちらりとカイルを見た。ここからは彼らの仕事だと言わんばかりに。

「皆様にも改めてお礼を言います。護衛を引き受けてくれてどんなにありがたかったか……」

アンジェラもカイル達の方を向き、感謝の意を示した。

魔族領の島から戻り、そこで長兄の計報^{ほうほう}を聞いたアンジェラは、迷った末に帝都に戻る決意をした。自分に何ができるか解らなくとも帝国の危機を放っておけなかったからである。そして、カイル達に帝都に戻るまでの道のりと、帝都内での護衛を依頼したのだ。

それはつまり、これから起こるであろう帝国内の騒動に彼らを巻き込む形になる。それでもカイルが即座に引き受けてくれたことを、アンジェラは長兄を失ったばかりの自分を氣遣ったものと受け取っていた。

「……本当に、カイル様も皆さんも英雄と呼ばれるのに相応しい高潔^{こうけつ}な精神をお持ちなんですネ」カイルはアンジェラの高評価に少し困り顔になる。

「いえ私としまして、この件は放っておけませんので……」

この発言はカイルの紛れもない本心だった。

アンジェラの護衛は、元々この件に介入するつもりだったカイルからしてみれば渡りに船で、むしろ自分の目的のために利用させてもらったくらいの気持ちだ。

「それに皆も、どんな状況だろうと苦にしませんからね」

カイルは仲間達の方を見る。

「ふう、変装するというのも中々気を遣うな」

顔につけていた汚れを拭いながら、ウルザが安堵のため息をついた。

「ウルザなんか目立つから大変よね。それに比べてあたしはこういうのが似合っちゃうのよね、悲しいことに」

リーゼは自分の変装を見ながら苦笑している。

「俺なんかどんなに隠しても内面から輝きが滲み出てしまうから……って聞けよ」

セランのいつもの戯言は、やはりいつものように無視される。

英雄になるというカイルの目的のため、一向はこれまでなるべく目立つように常に行動してきた。なのでこのように人目を忍ぶのは旅が始まって以来のことで、少々戸惑いいつも新鮮な体験であり、皆それなりに楽しんでいたようだ。

そんな仲間を横目に見ながら、カイルが積み荷の中に隠していた自分の愛剣を取り出すと、つぼもとの宝玉が光り出す。

『妾も変装してみたかったのだが……』

シルドニアはそうぼやいたが、本体はあくまでこの剣であり、人目を忍ぶには魔力で作り出した分身をひっこめればいだけなので、変装の必要は勿論ない。

（しかし、これから帝国のお家騒動に首を突っ込もうというのに、皆元氣だな）

どんな状況でも余裕の態度を崩さないいつも通りの仲間達に、カイルは少しだけ呆れる。だがそれは、方針を決める自分に対する信頼を表してもいる。

（何の文句も言わずに付いてきてくれる皆に、俺は何ができるんだろう……このままでいいのだろうか？）

このところよく浮かんでくる結論の出ない自問自答を、カイルはまた繰り返しそうになる。

「無事に入れたようね」

そこへ、迎えのマルニコ商会の店員の中に紛れていたミナギが話しかけてきた。一人だけ先行し、一日早く帝都に潜入していたのだ。

「……そっちこそ何も問題はなかったのか？」

「ええちよっと面倒だったけど、私一人なら何とかなるって言ったでしょ」

何でもないことのようにミナギは言うが、その声にはどこか誇らしげな響きがあった。

ミナギの役目は情報収集にあるのだが、今回は警戒厳重な封鎖された帝都に入れるかどうか不安で、出発前、カイルは彼女の単独行動に難色を示した。

そんな心配をミナギは笑い飛ばしていたのだが、どうやら本当に杞憂（きゆう）だったらしい。

「いや、腕の方は信頼しているんだが、ミナギは時々妙な不運に見舞われるからな」

カイルの指摘に少し自覚のあるミナギは、整った眉をぴくりと動かした。

「う、うるさいわね……とりあえずざっとだけど、情報収集してきたわ」

ミナギは丁度半年前まで帝都に長期潜入していたので、この地に慣れていた。そのため僅か一日の間にも、ある程度精査された情報を手に入れることができたのだ。

「解った、じゃあ早速で悪いが報告を頼む」

カイルの言葉に、ミナギは軽く頷いた。

クラウスに用意してもらった会議などを行うための部屋で、全員が長いテーブルに着いた。いつものカイルとその仲間達の他、今回はアンジェラ皇女とクラウスも同席している。

「さて、これからどうするかを決めるためにも、詳しい情報を聞きたい……頼む」

カイルがそう言うと、ミナギは皆を見回した後、ゆっくりと口を開く。

「はっきり言えば、帝国はこのまま内戦になってもおかしくない状況ね」

「既にそこまでいつているか……」

予想以上に悪い報告に、カイルは額に手をやりながら嘆（なげ）き、アンジェラも表情を硬くする。

「まず、公式にはエルドランド皇子はあくまで急死で、暗殺されたというのは噂に過ぎない。だけど、その発表直後から軍が帝都への出入りを完全に封鎖している。それは犯人を逃さないためであって暗殺はほぼ確定事項だ、とされているわ」

「あの警戒ではそれも当然の流れだな……」

ウルザが門の警備を思い出しながら言った。

「それで……ずっと行方不明だったアンジェラ皇女に関しても、ほぼ死亡したものと伝わっているわね」

「私に関してはその方がいいでしょう。生きていると知られれば、また命を狙われますから」

ちらりと自分を見たミナギに、アンジェラはそう答えた。

「で、誰が殺したのか、というのと同じくらい話題に上っているのが、皇帝の後継者がどうなるか、という問題ね」

それを聞いてカイルの顔が険しくなる。彼が何よりも恐れているのは、この後継者争いから発展する内戦だからだ。

「候補になってるのは三人ね、第二皇子コンラート、第三皇子マイザー、そして第一皇子の遺児である皇太孫ノルド……そして、この三人のうちの誰かが、エルドランド暗殺犯の黒幕の可能性が高いと言われているわ」

共に連携して戦った仲である。裏世界の住人である彼女も多少なりと氣遣ったのか、アンジェラの顔を見て少し言いくさそうにしながらも、ミナギは自分の調べた情報を伝えた。

「当然そうなりますね」

だがアンジェラもこの流れは解っていたようで、すんなりと頷く。

暗殺の動機として一番考えられるのが、帝位に関する理由である。エルドランドが死んで最も得をする者、つまり次期皇帝になり得る人物が疑われるのは自然な話だ。もしかしたら自分の兄弟達が長兄を殺したかもしれないという事態を、アンジェラはしっかりと受け入れていた。

「ですが、私を襲った者とエルドランドお兄様の暗殺犯が同じだとしたら、三人のうちの誰かが黒幕の可能性は低いです。帝位が目的ならば、私を襲う意味はありませんから」

アンジェラに帝位の継承権はない。ガルガン帝国には女性の皇帝、女帝は存在しないのだ。

もともとこれは、帝国の前身であるガルガン王国に女王を立てる風習がなかったために過ぎない。現皇帝ベネデイクスが建国した現在のガルガン帝国は実力主義であり、女性でも高い地位に就けるので、将来的には女帝が生まれるだろうと言われている。

「継承権のない私を暗殺したところで意味はありません。それもエルドランドお兄様より先に私を狙えば、こちらの警戒を強めるだけです。それに、本来なら帝位を継ぐのは嫡子筋にあたるノルドが妥当でしょうが、帝国を背負うにはまだ幼すぎます……犯人であることはまずありません」

アンジェラにとつての甥、皇帝にとつて孫に当たるノルドはまだ四歳だった。帝位を狙って自らの父親を暗殺するとは、どう考えても無理がある。

「……で、この混乱に拍車をかけているのが、未だに皇帝からの正式な発表がないことなのよ」

ミナギは理解できないという風に頭を振った。

皇帝ベネデイクスが三人のうちの誰かを後継者として正式に指名すれば、少なくとも表向きの混乱は収まるはず。早期收拾を図るためには当然すべきことであるのに、実際はエルドランドの葬儀の日程すら決まっていない。

「それが解らない、何故なんだ？」

カイルも納得できない顔になる。

カイルの知る歴史では、ベネデイクスは後継者にマイザーを指名した。だがそれは本当に死の間際のこと、正式な手順を踏んでいなかった。そのため、指名が捏造だと訴える者、ベネデイクスは正常な判断ができなかったので無効だと言い張る者が出てきた。それを踏まえ、カイルとしても混乱が起きないうちに早く指名をしてもらいたいところであった。

その疑問に答えたのはアンジェラだ。

「発表しない理由があります、おそらくお父様はまだこのことを知らないでしょう」

「知らないとはどういうことです？」

カイルは思わず聞き返してしまう。帝国の存亡にさえかわる事態だというのに、皇帝が暗殺の件を知らないなどありえない。

「……お父様はもはや床から身を起こすことさえ困難で、医者の話では持つてあと二月か三月。これまでもずっと意識が混濁こんだくすることが多く、数日間意識不明の状態が続くこともあるそうなのです……」

現在の帝国で秘中の秘とされている事柄を、アンジェラは沈痛な面持ちで語った。

3

「そ、そこまで具合が悪かったのですか……」

クラウスもこの話は知らなかったらしく、思わず驚きの声を上げる。

皇帝ベネディクスの体調が優れず、公務から遠ざかっていることはよく知られた話だったが、詳

しい病状は公開されていなかった。

「正確には、本来ならとうに尽きている命を、神聖魔法や希少な魔法薬で何とか引き延ばしている状態で、そのための昏睡こんすいでもあります」

「そこまでして時間を稼いでいるのは……やはり跡継ぎ問題のためでしょうか？」

悲しげなアンジェラの様子を見たカイルが迷った末に質問すると、彼女は小さく頷いた。

確かに退位が囁ささやかれてはいたが、ベネディクスは一代で大帝国を築き上げた稀代まれの英雄として、人族全体でも重要な存在である。彼の復帰を願う声は大きかった。

広大な国土を短期間でまとめ上げられたのは、圧倒的な武威だけではなく、ベネディクスのカリスマ性によるところも大きい。その死に際して起こるであろう帝国内外の混乱を最小限に抑えるには、彼が存命のうちに後継者を指名し、それに相応しいとアピールする時間を稼ぐ必要がある。

（それでここ最近のエルドランドは積極的に表舞台に出てきていたのか……だがそれも無駄になっってしまった。どこのどいつが余計な真似を！）

カイルは内心でため息をついた後、毒づいた。

元々カイルの理想としてはマイザーに皇帝になってほしかったのだが、一番の目的はこれから迫るであろう魔族の総攻撃『大侵攻』時に、ガルガン帝国が国力を維持していることだ。このままエルドランドが帝位を継いでいれば、それはそれで何も問題はなかったというのに。

「コンラート皇子につくか、マイザー皇子につくか、ノルド皇太孫を後押しするか、それとも様子見するか……帝国内の貴族や有力者は揺れに揺れているみたい。その混乱と動揺を何とか抑えているのがベアドーラ宮廷魔道士とコロデス宰相^{さうしやう}だけど、それで手一杯という感じね」

話を聞いていたミナギが、帝国建国時から皇帝に付き従う側近中の側近二人の名を出した。

宮廷魔道士第一位の『偉大なる』ベアドーラは、人族全体で三人しかいない特級魔法の使い手で、彼女が存在するだけで帝国の軍勢力が底上げされるとすら言われている。

一方のコロデス宰相は、ベネディクス皇帝と友人としての付き合いも長い、有能な政治家だ。

「それに加えて、どの勢力がエルドランド皇子を殺したのかと疑心暗鬼も重なっているだろうから……こりや確かにこのまま内戦になってもおかしくないな」

セランはお手上げだと言わんばかりだった。

「私にも早速それらしき誘いがありました。どこの誰からとは申しませんが」

隠しても仕方ないと、クラウスは苦笑と共に言った。国内のみならず人族領全域の経済に大きな影響力を持つクラウスだ、それも当然だろう。

「へえ……で、どうするつもりだ？」

そう訊いたセランはいつも通りのにやけた表情だが、その目には鋭い眼光が宿っている。

「無論、一番儲かるように動くつもりです。ただ義理もありますし、秘密を共有している仲間でも

ある皆さんに不利益を被^{うけ}らせるつもりはありませんので、ご安心ください」

「ならいいけどよ」

肩をすくめるクラウスに対し、セランも口の端を歪めるような物騒な笑みを浮かべた。

「それでコンラート殿下と、マイザー殿下の動向は解るか？」

カイルが気にしているのが、中心人物であるこの二人だった。その動向次第で全ては決まると言っている。

「マイザー皇子の方は今まで通り、宮殿に留まっているらしいの。勿論宮殿内だから警備は万全なのだろうけど……コンラート皇子の方は安全なところに身を隠しているとか、既に帝都から離れて自分の領地に行ったとか言われていて、詳しいことは解らないわ」

今のところ噂以上のことは解らないとミナギは首を横に振った。流石の彼女も、一日ではそこまでしか解らなかつたようだ。

「なるほどのう……それではこれらを踏まえて聞きたいのだが、この先、帝国はどうなると思う？」

黙って聞いていたシルドニアが、アンジェラに訊ねた。

ガルガン帝国は若く勢いのある国で、それを生かして拡張し、栄えてきたが、だからこそ一度躓^{つまず}くと脆^{もろ}い。国の栄枯盛衰を知るシルドニアの質問には重みがあった。

「……私にも解りません。帝国が僅か数日でここまで一触即発の状況になるなど、誰も夢にも思っ



ていなかったでしょう」

アンジェラの声は流石に沈んでいる。

「やれやれ……これがコンラートやマイザーの仕業でないと仮定すると、ガルガンに恨みがあるか敵対している奴の仕業か？ もしそうなら大成功じゃな」

シルドニアの発言は皮肉でも何でもなく、あくまで事実である。

「鍵を握るのは軍部の動きでしょう。特に五人の將軍達の動きには気を付けなといけません」

ガルガン帝国には、他の国がほとんど持たない常備軍があり、兵士の数は十万を超える。

戦争となればこの数倍を動員できる国もあるが、主力となるのは農民からの徴収兵でしかない。

常備軍は機動力や装備、練度などあらゆる面でそれに勝っている。

これがガルガン帝国の強さの秘密でもあり、その常備軍は各將軍の下にある。彼らの動きに注目が集まるのは当然だった。

「このまま父上の命令がなく、將軍達の判断で軍部が介入を始めた場合……本当に内戦になります」
軍部に絶対の命令権を持つのは皇帝のみだが、皇帝が命令できない状態ならば、それに対する解
釈次第では將軍の裁量により軍が動く。

アンジェラ皇女の口から出た「内戦」の二文字。それを聞いた全員の反応は驚きや戸惑いなど様々だが、大体は半信半疑で、流石にそこまではいかないだろう、という希望的観測が大きい。

だがカイルだけは内戦の勃発に、確信に近いものを感じていた。それも、一年近く続く、人的被害が万を超える泥沼の内戦を。

重い空気に包まれた室内で、ミナギが言いにくそうに声を出す。

「あともう一つ、帝国が抱えている問題があるの。それも飛び切り厄介なのが」

「……その問題ってのは？」

まだあるのかと言いたげな顔でカイルが尋ねた。

「私にそんな顔をされても困るわ……ここに、ある人物が滞在しているのよ。帝国にとって重要で厄介な人物がね」

ミナギは帝都の地図を取り出し、宮殿の近く、上位貴族達が住まう高級住宅街の一区画を指でなぞる。

「……ジルグス国のミレーナ王女がここにいますわ」

完全に予想外な名前を聞かされ、カイル達の動きが止まった。

ミレーナ王女は、『ジルグスの至宝』として近隣諸国に知れ渡る有名な美姫だ。

また美しいだけでなく、聡明で慈愛に満ち、人を惹き付ける魅力を持つ、まさに女王となるべくして生まれた人、との評価を受けている。

もっとも、王国で起きた本人の暗殺未遂事件でミレーナ王女と関わったカイル達は、そんな彼女の裏の裏とも言えるべき顔を知っているのだが。

ともかく、レモナス王が亡くなった今もまだ正式に王位には就いていないが、近いうちに女王になる、カイル達にとっても因縁浅からぬ相手だ。

「えっと……ミレーナ王女って、あのミレーナ王女だよな？」

「他にいたら俺としては嬉しいんだがなあ……」

リーゼの問いに、その事実が起こす問題を想像して頭痛を覚えたカイルは、額に指を当てながら答えた。

「……なあ、何故ミレーナ王女が帝都にいるんだ？ 何かの間違いじゃないのか？」

何とか復活したカイルが藁にも縋る思いでミナギに訊くが、彼女は無情にも首を横に振る。

「どうやらエルドランド皇子と会談するために帝都を訪れていたらしいの。目的は両国の親善のようだけ……近衛騎士や兵を最低でも千人単位で引き連れてきたみたいで、彼女達には一区画がまるごと貸し出されているわ。で、会談当日の朝にエルドランド皇子が急死したのだから、当然会談は中止。本来なら帰国しているはずだけど、安全を確保できないとの理由で足止めを食らっているわ」

「帝国側が帰さないのか？ となると……」

「ええ、勿論それはただの名目で……疑っているのでしょうかね、暗殺に関与しているかどうかを」
ミナギが少し呆れを込めて言った。

「ほんとに頭が痛くなってきたな」

カイルからしてみれば、馬鹿な、と一蹴するような話だ。

現在の情勢で、ジルグス国からガルガン帝国に争いを仕掛けても何ら得るものはない。万一ジルグス国の仕業だとしても、ミレーナ王女が滞在しているときに仕掛けるなど百害あって一利なし。少し考えれば解る話だが、その少しの考えを持ってない者がいるのだろう。

「ジルグス国側もそれが解っているので、ほぼ立て籠っているような感じね……ちよつと覗いたけど、ジルグスの近衛騎士なんか、本来警備であるはずの帝国兵と目も合わせようとしなかった」

一触即発だったわ、とミナギは肩をすくめる。

「なるほど……確かに火種だ。それもとびつきのな。扱い方によっては両国間の戦争になりかねん」
今度こそ幻覚でなく本当に頭痛がしてきたカイルは、眉間部分を指で揉みほぐした。

ジルグス国とガルガン帝国の関係は以前からずっと良好とは言えず、約三年前には戦争寸前までいったことがある。現在は何とか小康状態といったところだが、ここから一気に悪化する可能性もあった。

ガルガン帝国は人族の中で最大勢力を誇る国家だが、ジルグス国もそれに負けない有数の大国で

あり、もし戦争となれば被害は甚大なものとなるだろう。

「帝都の大体の状況は解った。これからどうするかだな」

報告をあらかた聞いたカイルは、腕を組んで考え込んだ。

何よりも避けたいのは、このまま帝国が内戦に突入すること。

本来の歴史では、ベネデイクスは死の間際にマイザーを後継者と指名。これを不服としたコンラートとその支援についた勢力が反旗を翻し、内戦になる。これが一年近く続いた後、マイザーが勝利し、帝位に就くのである。

内戦で疲弊した帝国を立て直そうとしたマイザーだったが、国力が充分回復しないうちに魔族の『大侵攻』が始まってしまい、それが人族が滅亡寸前にまで追い込まれる遠因になる。

そして現状はその流れに沿っていて、最悪の場合、ジルグス国との戦争にもなりかねない。

（あの歴史を繰り返すわけにはいかない。だが内戦を抑えるにはどうすればいい？）

カイルとしてはマイザーに皇帝になってほしいが、それが叶わなくともとにかく内戦は起こさないようにする。それがカイルの第一目標だった。

「……とにかくもつと詳しくて正確な情報を知りたいな。できれば国の中枢にいる人物から」
どのように動くにしても、まずは各自の立場や思惑、目的を知らなければならぬ。

「それがいいわね。問題は誰に会うかだけだ……」

ミナギも頭を捻るが、思い浮かばないようだ。

当事者であるコンラートやマイザーにいきなり会うのは、おそらく無理だ。誰が味方で誰が敵か解らないこの状況では、一応顔を合わせたことのある当人達はともかく、疑心暗鬼に陥った周りから問答無用で敵とみなされる危険性がある。

「一番妥当なのはまずベアドローラかコロデスに会うことでしょう。お父様もこの二人は公私ともに信頼しております」

アンジェラが名を挙げたどちらも、皇族を除けば帝国の最上位にいる重鎮。長年帝国を支えてきた屋台骨であるこの二人なら、情報にも詳しいはずだ。

「その二人のうち、会うとするならベアドローラだな、面識もあるし……問題はどうかやって会うかだ。できれば目立つのはまだ避けたい」

アンジェラの名前を出せば会うことは容易だが、それでは人目を引いて動きにくくなるし、狙われる可能性もある。後々は派手にカイルの存在を示す必要性も出てくるだろうが、こういう状況か解るまでは危険を避けて、秘密裏に接触したい。

だが帝国の重鎮に会うとなるとそう簡単にはいかないし、状況が状況だ。ベアドローラも警戒していることだろう。

「ここで考えていても仕方ないだろ、とりあえずベアドローラの家に行ってみないか。運がよけ

れば、出入りしているところで会えるかもしれないだろ？」

考えるよりもまず行動、が信条のセランがそんな提案をする。

「……確かに今はそれくらいしかないかな。このまま籠っていても仕方ない」

目立つのは避けたいが、このまま無為に時間を経過させるのはもっと避けたい。現在他に打つ手はないので、カイル達は帝都の様子見も兼ねて行動を起こすことにしたのだった。

国中に顔が知られていることと本人の安全のために、アンジェラ皇女は留守番として別行動することとなった。

また半年前の武術祭で準優勝し、その後も活躍を続けて顔が売れているカイルも変装しておく。

変装といっても、全身を覆う外套を着て頭にもフードを被り、ひと目で誰か解らなくなる程度だが、これも怪しいといえば怪しい姿ながら、この変装で大事なものは剣を持つることにある。不意の戦いに備えることが重要なのだ。

(常在戦場……とまでは言わないが、常に戦う準備はしておかないとな)

カイルの脳裏には、丸腰で魔族のユーリガと突発的な戦いになったときのことが思い出されていた。

「いいか、くれぐれも目立つような真似はしないでくれよ。常に冷静さを心がけてくれ」

商会の建物から出ようというとき、先頭のカイルが振り向いて皆に注意を促した。
「解ってるって、心配性だな」

面倒そうに答えたセランに、本当に解ってるのかとばかりにカイルは更に念を押す。

「特にお前に対して言ってるんだぞ、本当に気を付けろよ」

現在はまだ正式に外出禁止と定められているわけではないので、出歩くこと自体は問題ないものの、自然と外出は控えるようになっており、商会前の目抜き通りにも人通りは少ない。妙に殺気だった見回りの衛兵も多く、そんな中で目立つ真似をしての採め事は避けねばならない。

「まったく……行くぞ」

カイルがフードを目深に被り直し、店から一步踏み出した、まさにそのときだった。

「おや？ カイルじゃないか？」

店の前を歩いていた通行人の一人から、驚きを含んではいながらも穏やかな声かけられた。

「うえっ!？」

妙に心に響く聞き覚えのある声に、カイルは思わず注目を浴びてしまうような間の抜けた声を上げた。振り向いたカイルの視線の先にいた男は、親しげな笑みを見せながらカイルに歩み寄ってくる。
「こんなところで会うなんて偶然だな。元氣そうで何よりだ」

「え、あ……いや、人違い……じゃなくて、えっと!」

だがカイルの方は咄嗟にまともな返事もできず、慌てふためきながら相手の顔を見ることしかできな
きない。

これといった特徴のない中年男性だが、確かに会った覚えはある。敵意を感じないし、何故か味方だとも思えるが、素性が解らない以上どう反応すればいいのか戸惑ってしまう。

「ロエールおじさん!？」

いつになく混乱しているカイルに代わり、驚きの声を上げたのは背後にいたリーゼだった。

「……………親父?」

その名を聞いて、相手が自分の父であることをようやく思い出すカイルであった。

4

「それにしてもリーゼちゃんもセラン君も一緒か。三人とも相変わらず仲がいいなあ」

出されたお茶を飲みながら、朗らかな声をかけてくるロエール。

店先であれ以上目立つわけにもいかなかったので、一行は一度店内に引っ込み、クラウドに頼んで商談用の部屋を空けてもらったのだった。

ロエールは落ち着いているというか、地元にいるのと全く変わらない。対照的に、対面に座るカイルはクッション性のある座り心地のいい椅子に腰掛けているはずなのに、どうにも落ち着かなかった。

（親父って昔から影薄いんだよなあ……何でだろう？）

カイルは、この父親を母親とは違う意味で苦手に感じていた。別に嫌いではないし、むしろ父子仲はいいと思うが、時々何を考えているのか解らないことがある。それもあってか、ないがしろにしているつもりはないものの、よく父の存在そのものを忘れてしまうのだ。

故郷を離れて旅に出てから、自発的に思い出すことは一度もなかったなあ、とかなり薄情なことをカイルは考えていた。

「おいおい、何でここにいるんだよ？」

隣に座っているセラランが肘で脇腹をつついてくるが、それを誰よりも知りたいのはカイルだ。

同じくカイルの隣に座っているリーゼの方はもう気を取り直したのか、故郷のことを尋ねたりしている。

「じゃあ皆元気なんだ」

「ああ、リマーゼは変わりないよ。君達の活躍を聞いて盛り上がったらしいからねえ」

うんうんと頷きながら、ロエールはじつと息子の顔を見る。

「あのカイルがね……僕からしてみれば未だにまだ小さい頃の、それこそ歩くのおぼつかないような子供の頃の印象が強いんだけど」

「そ、そんなことはないつもりだけど……」

しみじみと昔を懐かしむような顔になるロエールだったが、カイルの方は話の半分も頭に入っていない、どこかよそよそしい。

「ところで、さっきのあの格好は目立たないようにするためかい？ 有名になるのも大変なんだね」

「い、いやちょっと事情が……そ、それにしても、俺だってよく解ったね？」

先ほどの自分の格好を思い出したロエールに、カイルは引きつった表情を返す。まさかひと目で見破られるとは思っておらず、そのおかげで混乱状態になってしまったのだが。

「何を言ってるんだ、親子なんだから当然だろう」

解らない方がおかしい、と当然のようにロエールは言うが、子供が父親の存在そのものを記憶から消去していたとは夢にも思っていないようだ。

そんな父親から微妙に目を逸らしつつ、カイルはわざとらしい咳払いをする。

「こほん……色々聞きたいことはあるけど、そもそも何で親父がルオスにいるんだよ？」

故郷リマーゼはジルグス国の中のみならず人族領全体でも辺境に位置し、こころオスからはかなりの距離がある。ロエールの仕事は主に装飾品を作る細工師であるから、時折ジルグス国の王都マ

ラッドに納品に行くことはあっても、このルオスまで来る理由がカイルには思い当たらないのだ。

「僕もセラリアも帝国の、このルオスの出身だって言わなかったっけ？　それで里帰りというわけでもないけど、二人して来ているんだよ」

「そう言えば聞いたことがあったっけ……ってちょっと待て、じゃあ、まさか母さんも？」

「二人」と聞いたカイルはつい大声を上げ、続けざまにその真意を問い質す^た。

「だって……母さん、妊娠中なんだろう？」

カイルに続く第二子を妊娠中のセラリアが長距離を移動するのは、当然勧められることではない。

ここで、ロエールの朗らかな顔が初めて少し曇った。

「それがここに来た理由なんだ……実はセラリアの体調がよくなってね。難産になりそうなんだ」
ロエールの言葉に、カイルやリーゼ達の顔色が変わる。

「な……か、母さんは、母さんは大丈夫なのか！」

取り乱したカイルが思わず身を乗り出した。出産で命を落とすことは決して珍しくないのだ。

「ああ、問題はないよ。ただ大事をとってね、身重^{みおも}のセラリアを動かすのはどうかと思ったけど、ここなら神聖魔法の使い手が多いから」

あくまで念のためだよ、と強調するロエール。

医療が発達していないこの世界で病氣や怪我の治療に大きく貢献しているのが、神の力を借りて

行使する神聖魔法であり、その中には死すら覆^{くつがえ}す魔法もあると言われている。出産の際にも大きな助けとなっていて、高位の神官がいればまず命を落とすことはない。

だが神聖魔法を使えるのは神に仕える神官のみ。彼らは大抵は大きな街の神殿におり、リマーゼのような辺境ではほとんどいないか、いても初歩の魔法しか使えないのだ。

「ここなら色々^{つて}と伝手もある。だから迷ったけどセラリアを連れてきたんだ」

「そ、それならいいんだけど……」

カイルは座り直し、落ち着くように呼吸を整える。

「できればカイルにも伝えたかったんだけど、どこにいるか解らなくてね……たまには連絡くらいよこしなさい。僕もセラリアも心配していたんだから」

いつも静かに笑っている印象しかないロエールにしては珍しく非難めいた表情になり、カイルは言葉に詰まる。

「う……あ……その、ごめん」

目を逸らし、指先で頬を掻きながら、カイルはバツが悪そうに言った。

カイルはこの口数が少なく穏やかな性格の父親に怒られたことなど、ほとんどなかった。だからこそたまに言われる苦笑混じりの苦言や忠告は、妙に心に響く。

「まあ、心配はしていなかったよ、噂は伝わっていたし……あまりにも荒唐無稽^{かうとうむけい}なのが多いけどね。

魔族を倒して街を救ったとか、巨人を十匹まとめて倒したとか、ドラゴンを圧倒して従わせたとか……」

「うん、そこら辺は話半分で」

噂自体はカイルが意図的に流しているものが多いのだが、それに尾ひれがついているのだろう。

「とにかくセライアに会っていきなさい。喜ぶだろうし」

「いや、それは……」

ロエールは当然のように言ったが、カイルは即答できず考え込んでしまう。

今から、帝国の帝位継承問題に首を突っ込むうとしているのだ、万一にもこの両親を、特に身重のセライアを巻き込んでしまうのは避けたかったのだ。

「えっと、セライアさんはどこにいるんです？」

カイルの悩みを見て取ったリーゼが、誤魔化すように口を挟んだ。

「ああ、今はベアドーラ様の屋敷に厄介になっているよ」

「べ、ベアドーラ？」

思いがけず出てきた名前に、カイルが大きく反応した。セランとリーゼも思わず顔を見合わせている。

「セライアはベアドーラ様の弟子だからね。さっき言った伝手の一つだよ」

そんな驚くことじゃないよ、とロエールは笑いながら言うが、カイルとしてはそうもいかない。どうにかして会いたいと思っていたベアドーラに、思わぬところから繋がったのだから。

「ああ、何か予定があったのかい？　ならその後でもいいけど……」

「えっと実は……そのベアドーラ宮廷魔道士に会いに行こうとしていたところなんだ」

迷った末、カイルは正直に言うことにした。両親がベアドーラの家にいるのなら、いずれ解つてしまう可能性は高い。

「何だ、それなら丁度よかったな。さあ行こう」

いいのかそれで、とカイルから言いたくなるくらいロエールは何も聞かず、急かすように立ち上がる。

こうしてカイルは、全く予想外に家族との再会を果たすことになったのだった。

ベアドーラの屋敷は帝国の重鎮に相応しい規模で、人の背の三倍はあろうかという塀に囲まれていた。

しかし場所は帝国貴族が住まう地区の中でも隅の方にあり、規模の割には人気がない。

「……それでも警備は厳重だな」

塀を見上げたカイルが呟いた。許可のない者は入れないよう、強力な警戒の魔法が張り巡らされ

ていたためだ。

「だから忍び込めなかったのよね」

背後にいたミナギがため息混じりに答えた。ある意味で宮殿よりも警戒が強いこの屋敷に堂々と入れるならば、と付いてきたのだ。

かつて帝国のことを調べた際、魔法的な守りを乗り越えられず、この屋敷には潜入できなかったと彼女は言う。

「私もベアドローラの屋敷には入ったことはありませんでしたわ」

ロエールの話を聞いたアンジェラも、ベアドローラから直接話を聞きたいし、カイルの母親ならば是非会いたい、と付いてきていた。

カイルはできれば一人で来たかったのだが、結局押し切られ、おかげで全員が正体が解らないよう外套とフードという格好をしている。

確かに誰かは解らないものの明らかに怪しい集団である。人目を避けて移動してきたが、ここに来るまで一度も誰^{すい}何されなかったのは運がよかったに過ぎない。

「こっちだよ」

そんな集団をまるで気にすることなく先導してきたロエールが、目立たない裏口から屋敷内に入り、カイル達もそれに続く。

ロエールはこの屋敷に自由に出入りできるよう、魔法に反応しなくなる護符を渡されており、これは同行者にも作用するとのことだ。

屋敷内に入ると、まず庭に出た。きちんと手入れされているが、遊び心がないとも言えるような簡素な出来で、それが館^{あて}の主の性格を物語っていた。

本宅ではなく離れを借りているとのことなので、一行はそのまま庭を突っ切っていく。

「なんか……こつてあの書庫に雰囲気似ているね」

離れを見て、日光に弱い本のために半地下状に造られたカイルの家の書庫を思い出したリーゼに、ロエールが笑いながら説明する。

「どうか書庫そのものだよ。かつてセライアが住み込みの弟子だったときも、ここで暮らしていたんだ」

故郷でも書庫で一日の大半を過ごすほど本好きなセライアだ。奸婦にはあまり相応しくない場所かもしれないが、当人が落ち着くということで、ここを借りているらしい。

ロエールは地下への階段を下り、目の前に現れた木製の扉をノックする。そして中から返事があると、ゆっくりと開けた。

とても懐かしい返事の声に心がざわめいて緊張してきたカイルだったが、軽く深呼吸をして心を落ち着かせた後、ロエールに続いて室内に入る。